

まんだら通信

第229号 (通巻264号)

平成27年07月 西暦2015年 佛暦2581年 皇紀2675年

安房国八十八ヶ所 第一番札所
295-0103 千葉県南房総市白浜町滝口1084
真言宗智山派 天神山 紫雲寺 高栴 龍渉
郵便振替 00120-2-43163 紫雲寺
TEL0470-38-4740/FAX 0470-30-5040
<http://www.shiunji.org/>
Mail post@shiunji.org



歴史を正しく学べば、植民地だ侵略だという言い方が、恩を

だで返すことだと分かるはずなのですが。弟子が地元中学の図書室に読書の指導に時々通っています。戦争に係わる本は、先月号の『おじいちゃん戦争のことを教えて』のような、公平な読み物はなく「日本は侵略国家で、戦争好きで世界に迷惑をかけた」、式の朝日新聞が推奨するようなウソばかりで気が重くなると思っています。で、今日は別の方向のお話をしたいと思っています。

仁をなした日本というお母さんがあったためである。十二月八日は我々に重大な思想を示してくれたお母さんが、一心を賭して決断された日である。我々はこの日を忘れてはならない。」と『サイヤム・ラット』紙に発表しました。その他、インドネシア、カンボジア、マレーシア、インドネシア、フィリピン、シンガポール、パラオ共和国や太平洋の国々、ベトナム、インド…どの国も日本が主導してアジアのリーダーになる日を行っています。何故なら、日本は戦後七十年、自分のために見返りを欲しがって援助するという、さもしいことをしなかつた珍しい国だからです。忘れてはいけないう一つ一つの国にスリランカがあります。

阪神淡路大震災の大混乱の中、山口組のおつかないお兄さんたちが真っ先に炊き出しをして、被災した人たちに感謝されましたが、日本のマスメディアは記事にもニュースにもしませんでした。

困った人を見たら黙って見過ごせない。人の弱みにつけ込むなど卑しい人がするもの、これが日本人ですね。国と国の関係でも全く同じこと。日本が開国した明治初め、北の大国ロシアは朝鮮半島を自分の物にするため、その機会をうかがっていました。北ヨーロッパでも東ヨーロッパでも、周りの国といつてもいざこざを起す嫌われ者でしたから、亡国の憂き目を見る前にと、朝鮮の李王朝に近代化の説得を続けました。

今、ことあるごとに日本を悪くいう中国の人たちも提灯行列で祝ったそうですし、『東京裁判』はそもそも無効なので、東條さんたちA級被告を含む総てに無罪判決をした、インドのラダ・ビノード・パール判事は「日本が日露戦争に勝った時、まるで自分たちが勝ったような思いで大人に混じって毎日パレードをした。」と振り返っています。そして「やがて正義の女神が正しい判断を下す時が来るまで、特に日本の若い人たちは、自分たちの誇りを見失ってはならない。」と激励しています。

その開村式には、今の橋本御前さまが、暑い日差しの中、法衣に袈裟という正装でご名代として現地に行かれました。たまたまランポクナガマの成田幼稚園に居候していた私も、閣僚や沢山のお坊さんが居並ぶ開村式にお供しました。二十年ぶりの日本人との再会に、村の人たちはとても喜んでくれたようで、大急ぎで家にとつて返し、見せてくれたのが上の鶴見ご貫主の写真です。二十年の間、部屋に飾ってあったのでしよう。恩というか親切を忘れないその心根に、胸が熱くなったことでした。

中越地震の時には、孤立した山奥のスーパードの主人が、二千五百円相当の商品を袋詰めにして四百円で売った時、喜ばれたお客さんに「困った時はお互い様ですから。」と、こともなげに話したと聞きました。

その間、朝鮮半島絡みで、二つの巨大国と日清・日露の戦いをする羽目になり、発展途上国の我が国は危うく国を滅ぼす瀬戸際に立ちました。おまけに日本自身を守るためとは言え、『日韓併合』で、鉄道も道路も戸籍も学校も病院も、車輪で動くものも、更には女性には名字もない

の飼猫のミケと同じということ)と、ないない尽くしの国を背負い込むことになりました。歴史を正しく学べば、植民地だ侵略だという言い方が、恩を

五年前スリランカを訪問した時、アンギラサさんをお願いして『ツルミ・ガマ(鶴見村)』を再訪しました。前の成田山の御前さま鶴見貫主が、二ヘクタール半の土地に五十戸の家を建て、電気を引いて寄付しました。その開村式には、今の橋本御前さまが、暑い日差しの中、法衣に袈裟という正装でご名代として現地に行かれました。たまたまランポクナガマの成田幼稚園に居候していた私も、閣僚や沢山のお坊さんが居並ぶ開村式にお供しました。二十年ぶりの日本人との再会に、村の人たちはとても喜んでくれたようで、大急ぎで家にとつて返し、見せてくれたのが上の鶴見ご貫主の写真です。二十年の間、部屋に飾ってあったのでしよう。恩というか親切を忘れないその心根に、胸が熱くなったことでした。

富山県のある病院で、実際にあった話です。

藤原秀夫さんは、元小学校の校長先生で、すでに八十歳を超えておりますが、とてもお元気です。元気なお年寄りがなぜ病院でと申しますと、末期がんで苦しんでいる奥さんが入院なさっていて、藤原さんはその付き添いで通って来ていらつしやうたのです。

品のいい、妻思いのやさしいおじいちゃん。しかも、元校長先生。さぞ、幸せな人生を歩まれたのではないかとおぼやかしますが、人は見かけによらぬもの、藤原さんのその生涯はひと言では言い表わせない、まさに艱難辛苦かんなんしんくを乗り越えた一生だったそうです。

秀夫さんは、昭和十年、富山県の山間部の小さな村で五人きょうだいの末っ子として生まれました。家は、貧しい農家で、お母さんは秀夫さんを出産した翌朝から畑仕事に出たそうです。そんな無理がたたつたんでしよう。秀夫さんのお母さんは、秀夫さんが三歳になる前に亡くなりました。しばらくして、お父さんは後妻を迎えましたが、この新しいお母さんが、とてもきつい人で、特に一番下の秀夫さんにはつらくあつたと言います。「言うことをきかない」という理由で、ごはんを抜かされたことが何度もあつたと言います。そんな秀夫さんも、やがて中学生になり、遠くの中学校まで徒歩で毎日山道を通いました。学校まで一時間はかかったというから大変ですね。その頃の秀夫さんの夢は、学校の先生になることでした。本を読むことが好きで、時間があれば、学校の図書室に通っていた秀夫少年。でも、先生になるには、大学を出なければなりません。(とても大学なんか、行かせてもらえないや。あんちゃんも姉ちゃんも、みんな中学を出たら、富山市に出て働いている。僕も、そうなるんだらうな) そう思いながら、その日も図書室に行ったのですが、そんな少年がそこで一人の美少女と出会ったのです。

それが当時、一学年上の二年生の長谷川恵美子さんでした。目元涼しく、お下げ髪の美少女とでもいうのでしょうか、図書室の窓から差し込む淡い光の中で、その姿は少年にはまぶしすぎたようです。

(世の中には、こんなきれいな人がいるんだ) 秀夫君は、それ以来、図書室に行くのが楽しみになりました。

そんなある日のこと、「あなた、藤原君で言うんでしょ」と彼女から廊下で声をかけられました。「はい、そうです。」「あなたって、勉強がとてできるんだってね。私、あなたの隣のクラスにいる弟から聞いたわ。」「そうですか。」「じゃあね」彼女は、それだけ言うと、早足に廊下を去って行ったそうです。

その時のことは、一生忘れないと秀夫さんは言います。それから、彼女の家も同じ方角だったので、図書室で会うと、いつしよに家に帰るようになりました。そして、それから一年半、いろいろな話をしました。一番印象に残っていることは、彼女のこんな言葉でした。

「秀夫君、どんなことがあつても夢を諦めちゃいけないわ。私と約束して。秀夫君、絶対、学校の先生になるのよ。あなたならなれるし、なつてほしい。だって、貧しい家の子や身体の弱い子、恵まれない子の気持ちがあるとならぎつとわかるから」

一年半というのは、秀夫君が中学三年生の時、彼女は家の都合で金沢の高校に行ってしまったからでした。それから、しばらくは恵美子さんと秀夫君の文通が続きました。秀夫君は、中学を出ると夜学の高校、大学の夜間部を卒業して、教員免許をとり、恵美子さんに喜んでもらおうと手紙を出しましたが、こんな返事が届きました。

「よかつたね、私はあなたを誇りに思います。私は、あなたのような人と一緒に人生をずっと生きていきたかつた。でも、お願いがあります。もう、手紙を寄せさないでください。私、まもなく、結婚します。さようなら」

秀夫君の初恋は、これで終わりました。それから、六十年……。秀夫さんは、そんなことも忘れかけていました。そして、奥さんが思いがけずがんで入院したのでその看病で、富山のその病院にやってきたのです。

奥さんの病室が決まったというので行くと、看護師さんに四人部屋に案内されました。

「失礼します。家内がお世話になります。藤原秀夫です」そう、三人の患者さんに挨拶をすませ、「おい、どうだ。痛くないか」と奥さんに声をかけ、ずっと横向きの奥さんの背中をさすってあげていました。奥さんは、それまでの治療に疲れていたのでしょうか。静かに寝息を立てて、眠っていました。

「ゆっくり、おやすみ。眠っている時は、痛まなからね」奥さんの骨の目立つ背を撫でながら、秀夫さんはベッドの脇に座り直しました。と、隣のベッドにいた白髪の女性がじつと藤原さんの顔を見つめています。そして、小さな声で、こう言つたのです。

「秀夫さん、恵美子です。覚えていらつしやいますか」

秀夫さんは思わず「あつ」と声を上げました。中学時代に毎日、図書室で会つていた一学年上の美少女が、まさか妻の隣のベッドにいたのです。秀夫さんは、奥さんの様子を振り返り、まだ寝息が聞こえるのを確かめると、恵美子さんのベッドに近寄り、差し出した細い手をしっかりと握り返しました。心なしか、力が入りました。

(僕がここまで来れたのは、恵美子さんがあの時、僕を励ましてくれたからだ)

そう思うと、胸が一杯になり、何も言えませんでした。恵美子さんも胸が熱かつたのでしよう。手を放すと、寝返りを打ち、ふとんをかぶつてしまいました。背中が震えていました。秀夫さんは、再び、奥さんのほうを向き直り、背中をさすること以外何もできませんでした。

その日は、そのまま終わりました。翌朝、病室に入ると、奥さんの隣のベッドが空いたままです。

転院したのか、別の病室に移つたのか、はたまた未明、恵美子さんに何かがあつたのか、秀夫さんは誰にも聞けぬまま、いまでも亡くなられた奥さんの最後の病室でのあの日の「一瞬の午後」のことを思い出しているそうです。

▼95歳におなりの寺田能化(のうけ)さまは、お元気に4年間の任期を全うされ、6月21日日、惜しまれながら総本山智積院から、ご自坊である館山市沼の大寺に、お元気にお帰りになりました。

私も、お送りした時と同じように、孫弟子龍祐や地区の皆さんと一緒に、お迎えのために京都まで行ってきましたが、思えばあつという間の4年間でした。

7月1日には、富浦のホテルでご退任お祝いの祝賀会が催され、成田山の橋本御前さま始め、大勢の皆さんで賑わいました。

これからは、悠々自適の生活をなさいますように…と申し上げたいところですが、私のような“不出来”者が地元にはいっぱいいますか

ら、威儀(いぎ)説法という、言葉は使わずとも、生き方そのもののご説法をお願いせねばなりません。▼今年の梅雨は雨降りが多すぎます。3年ぶりに住み付いてくれたニホンミツバチが、出入り口から外をのぞいて、雨がやむと大急ぎで密集めに飛び出すので、出るハチと帰るハチで入り口が押すな押すの大渋滞です。

今年の群れは今までにない大群で、脇目も振らずに働く様子は昆虫とは言え健気なもので、見飽きることがありません。それだけにこれから先、スムシやスズメバチなどという、命取りの天敵が心配です。

▼2組のツバメ夫婦、一組は先

日、4羽とも無事に巣立ちました。風呂場の方のも、巣立ち間近のようで、雨続きの中を両親がせつせと餌運びを続けています。それにしても、猫どもといいつバメ家族といい、折り合いをつけて暮らすって、なかなか骨が折れることです。

▼梅雨の晴れ間、今年も庭の芝生のネジバナ【ラン科ネジバナ属】が咲きました。

草丈は10~20センチ。

下から、螺旋状に咲きのぼる可憐な姿が珍しく、赤紫の明るい色と相まって、鬱陶しいこの季節、傘さしながらしゃがみ込んで暫し見入る。

ほっとするひと時です。

2015.07.10 龍渉

